

動詞 help の補文構造について

森 敏郎

1. 導入

(1)に示されるように、動詞 help には不定詞補文が後続可能である。注目すべき点として、(1b)に示されるように、help の直接目的語が顕在化されない構文が許されることが挙げられる。この文は“Some woman wrote her thesis with the help of John.”という解釈を持つ。

- (1) a. John helped Mary (to) write her thesis.
b. John helped ___ (to) write her thesis. (今西 (1988: 437))

Rizzi (1986)は(1b)のような構文が(2)に定義される Bach の一般化にとって例外となる可能性を指摘している。

- (2) Bach's generalization
In object control structures the object NP must be structurally represented. (Rizzi (1986: 503))

もし(1b)の構文が目的語コントロール構文の例であるならば、help が直接目的語を伴わないため、Bach の一般化の妥当性について問題を提起する。

以上の議論に加え、(1a)と(1b)の構文には、得られる解釈に関して差があることにも注意が必要である。インフォーマントによると、(1a)のように help の直接目的語が顕在化される場合は、help の主語が不定詞節で表される行為を直接遂行しない解釈、すなわち、論文を書くという行為に対する間接的な援助を行う解釈が許される。一方で、(1b)のように help の直接目的語が顕在化されない場合は、help の主語が不定詞節で表される行為を直接遂行する解釈のみが得られ、間接的な援助を行う解釈は得られない。(1b)の構文が持つこの特性を本稿では直接的関与の制限と呼ぶ。

Bach の一般化に関する議論と直接的関与の制限から、help の直接目的語が顕在化されない(1b)の構文は(1a)の構文とは異なる性質を持つことが示唆される。本稿は(1b)を目的語コントロール構文の例とはみなさず、当該の構文において help と後続する不定詞はそれぞれ *v* と *V* の位置を占める要素であり、Bach の一般化に抵触しない構造を持つと提案する。

2. 直接目的語が非顕在の help に関する特性

(1b)の構文が(1a)の単なる異形であるとする見方にとって問題となるいくつかの特性を概観する。統語的側面に関して、第一に、(3)に示されるように、(1b)の構文における非顕在の目的語は照応形の先行詞になることができない一方で、(4)に示されるように、help の主語は先行詞になることが可能である。

- (3) I know Mary very well. *I must help (to) prepare herself in her new station in life.
cf. Mary helped John_i (to) wash {him_i/himself_i}. (cf. 今西 (1987: 70))
(4) I helped (to) promote {*me/myself} all over town.
cf. I helped them (to) promote {me/*myself} all over town. (cf. 今西 (1987: 69-70))

第二に、(1b)の構文では不定詞補文において受動態が許されない。

- (5) * John helped (to) be elected by the Senate. (cf. 今西 (1987: 66))
cf. John helped Bill (to) be elected by the Senate. (informant)

第三に、自動詞の一部に関して生起が制限される。(6)に示されるように少なくとも非対格動詞の生起は許されないが、今西 (1987)が観察しているように、自動詞の生起に関する制限は意味的なものであり、(7)に示されるように一部の非能格動詞の生起は許される。しかし(8)に示されるように、不定詞補文に生起することが許されない非能格動詞も存在する。

- (6) * John helped (to) go away.
cf. John helped Bill (to) go away. (Rizzi (1986: 504))
(7) a. John helped (to) wash up. (今西 (1987: 66))
b. John helped (to) pay for the tuition. (cf. Ishihara (1999: 32))
(8) * John helped (to) {swim/sing}. (Ishihara (1999: 32))

したがって、これらの容認性の差に関わる制限を明らかにする必要がある。本稿では紙幅の都合上、詳細な議論を省略するが、前述の直接関与の制限に反しない限り一部の非能格動詞の生起は許されると考える。

以上の観察より、本節では、help の直接目的語が顕在化されない(1b)の構文は、(1a)の単なる異形であるとする見方にとって問題となるいくつかの特性を持つことが示された。

3. 提案

今西 (1988)は(1b)の構文に(9)に示される構造を仮定している。しかし、一般に英語では空の目的語は許されないで、統語構造上に暗黙項(IMP)を仮定することは望ましくない。また、次節で後述する理由により PRO を仮定しない構造が妥当であるため、本稿は(1b)の構文に関して(10)の構造を提案する。

(9) NP help IMP_i [PRO_i (to) VP] (今西 (1988: 437))

(10) [_{TP} T [_{VP} John [_v help [_{InfP} to/∅ [_{VP} write her thesis]]]]]

(10)において、help は軽動詞として v に併合され、help により選択される不定詞補文は専用の機能範疇 Inf(initial)P であり、Inf を占める不定詞標識(to または ∅)により原形不定詞と to 不定詞が区別される。

(10)における help と不定詞標識のステータスを支持する証拠を見る。第一に、help のステータスに関して、Mair (1995)は、「ある者が他者の行為を助ける」という help 本来の意味の希薄化を指摘している。(11)の例において、追加の金銭が支払いのための部分的援助になることを表すことが help の唯一の意味的貢献であり、help 本来の意味は薄められている。この観察は help が v を占める軽動詞であるとする分析を支持する。

(11) This additional money is used to help pay the clergy and bills like heating and lighting. (Mair (1995: 265))

第二に、インフォーマントによると、同一文中に help が 2 度生起し、それぞれに to 不定詞と原形不定詞が後続する例(... can help preserve the environment and also helps to produce high-quality coffee)において、不定詞の種類を入れ替えても文の意味は変わらない。したがって、この場合の to 不定詞と原形不定詞は単なる形態的異形であり、このような不定詞補文を選択するのは help の特性である。ここではこの選択特性をとらえるため、Harwood (2014)における精緻化された動詞句領域の構造を採用する。森 (2019)は原形不定詞を補部にとる法助動詞に関する彼の提案を ought to に拡張し、(12)に示される構造を提案しているが、(10)の構造はこの提案を help の不定詞補文に拡張したものである。

(12) [_{TP} T [_{ModP} will/ought [_{InfP} ∅/to [_{VP} V-v ...]]]]]

第三に、help と不定詞が持つステータスを支持するために、(13)に示される二重動詞構文との類似性に注目する。この構文は 2 つの動詞が表す出来事が同時でなければならないという特性を持つが、(13)では買うという出来事が行われなことを示す節が後続しているため容認されない。

(13) * They go buy vegetables every day, but there never are any vegetables. (Shopen (1971: 258))

インフォーマントによると、(14)の対比に示されるように、(1b)の構文にも同様の特性が観察される。(14a)において助けることと書くことは同時に起こるため、論文が進まないことは有り得ず容認されない。

(14) a. * John helps (to) write her thesis every day, but there's no progress.

b. John helps Mary (to) write her thesis every day, but there's no progress. (informant)

Kume (2009)は、二重動詞構文に含まれる 2 つの動詞がそれぞれ v と V に位置するとし、それらの動詞が持つ出来事項が同一の機能範疇 T に束縛される構造に出来事の同時性を帰着させている。この提案に従えば、(10)の構造において help と後続する不定詞が同一の T を共有しているので、(14a)に示される同時性の解釈が正しく説明される。

4. 説明

2 節で提示した(1b)の構文が持つ特性は、(10)の提案の帰結として説明される。まず照応形の分布(3)-(4)に関しては、(10)の構造には非顕在の目的語が存在しないため、(3)のように対応する照応形が生起できず、一方で help の主語は同一節内で対応する照応形を束縛するため(4)は文法的であると説明される。次に、受動態が不可能であるという(5)に示した制限は、(10)の構造が外項を必要とすることから導かれる。(なお、この説明は非対格動詞を含む(6)にもあてはまる。)以上の説明に対して、もし仮に(1b)の構文に PRO の存在を認めてしまうと、(15)に示される構造において受動態が生起可能であることが誤って予測される。この点で PRO を仮定しない(10)の構造が妥当であると考えられる。

(15) [_{TP} John [_{VP} _tJohn helped [_{TP} PRO (to) be elected _tPRO]]]

最後に、直接的関与の制限を考える。“John killed Mary.”のような他動詞文において、VP により表される「メアリーを殺す」という出来事において Mary を殺害するのは John であり、v の指定部位置を占める John が VP により表される出来事に直接的に関与すると考えられる。これと並行的に、(10)においても、John が VP により表される出来事に直接的に関与することが導かれると考えられる。